

南アルプス鋸岳で初めて発見されたオニク（ハマウツボ科）の 新品種キバナオニク

竹重 聡^{*1}・五味 直喜^{*2}・木下 義彦^{*3}・佐藤 仁昭^{*4}・宮澤 豊^{*5}・酒井 志磨^{*6}・菅原 敬^{*7}

A New Form of *Boschniakia rossica* (Cham.et Schltdl.)B.Fedtsch. (Orobanchaceae)
found from Mt.Nokogiri-dake in the Southern Alps, Japan

はじめに

オニク属 (*Boschniakia*) は、ハマウツボ科の葉緑素の無い寄生植物で、インド北部から中国やロシアなど東アジア地域、そして北アメリカ大陸に4種類が報告されている (Mabberley 2017)。日本国内にはオニク { 御肉 *B.rossica* (Cham.et Schltdl.)B.Fedtsch } 別名キムラタケとも呼ばれる1種が知られるのみである。花期は7～8月。高さ10～30cm、平均15cm。北海道（大雪山系に多い）、本州（尾瀬～白山、富士山、北アルプス、八ヶ岳）（清水 2002、山崎 2003）。茎は太い円柱形の棒状で基部の太さは20mm、上部にかけてやや膨らみ25～35mm、赤紫色又は赤褐色の鱗片葉（裏は白黄系）を互生する。花は暗紫色、縁は細かく白い鋸歯状、2唇形。亜高山帯～高山帯に生える多年草で、花は結実後2～3年かけて朽ちる。ミヤマヤシャブシやミヤマハンノキの根に寄生する。2018年7月の南アルプス北部鋸岳周辺地域を対象とした野外調査で、オニク類似の奇妙な植物を初めて発見した。その後の調査で、この植物はこれまで報告のない新たな分類群に位置づけられることが判明し、オニクの新品種キバナオニクと命名された (Sugawara & Takeshige 2020)。本報では、この新分類群発見の経緯、生育地の環境状況や形態的特長について述べる。

調査背景

2010年に修了した信州大学自然環境診断マイスターの有志で、南アルプス北部の釜無山～横岳～鋸

岳、富士川源流域一帯の植生等生物調査を2016年ごろから計画していた。この尾根の北東斜面一帯の長野県富士見町と山梨県北杜市の境を流れる川は、釜無川と呼ばれ、斜面一帯は釜無川支流域、または釜無川源流域と呼ばれている。

釜無川源流域は、登山道入り口から鋸岳までの登山時間が片道5時間と長く、さらに手前の国道20号から入った釜無林道ゲートから先は、許可車両以外侵入禁止のため、登山道入口までの9kmを歩かなければならない。このルートは日帰りが困難なため、今でも登山者及び研究者の入山が少ない。また谷の地形が急峻で自然災害が多く、事前の通行確認



2018.7.22 11:29 オニクらしい黄色い植物



2018.7.22 10:48 鋸岳山頂左側の頂で発見

^{*1} 竹重 聡 〒 381-2205 長野県長野市青木島町大塚 1290-18

^{*2} 五味 直喜 〒 399-0101 長野県諏訪郡富士見町境 1
2067-686

^{*3} 木下 義彦 〒 399-2221 長野県飯田市龍江 5439-2

^{*4} 佐藤 仁昭 〒 399-8204 長野県安曇野市豊科高家 3923-3

^{*5} 宮澤 豊 〒 398-0001 長野県大町市平 5439-2

^{*6} 酒井 志磨 〒 396-0213 長野県伊那市高遠町東高遠
1353-1

^{*7} 国立科学博物館 〒 305-0005 茨城県つくば市天久保
4-1-1



2019.7.28 10:01 低い鞍部の右岩
棚で発見



2019.7.28.10:29 自生状況の環
境特性



2019.7.28 12:55 黄色い植物と赤
褐色のオニク



2019.7.28 11:14 新品種キバナオニク



2019.7.28 11:02 赤褐色のオニク

が必要となる。このためほとんど県内で研究報告例の無い山域となっている。これらの理由から、登山者がほとんど利用しない鋸岳までのルートと、横岳の奥にある釜無山に至る途中の白岩までのルートを、調査範囲とした。

発見経緯と形態的特長

2018年7月22日、鋸岳山頂（2685m）に至る登山道沿いの植生等を調べるため、竹重聡・五味直喜・木下義彦・佐藤仁昭・宮澤豊・酒井志磨のマイスター6人で第一高点を下って岩場の尾根を登坂していた。この野外調査中に、ハマウツボ科のオニク属と思われる、花色がくすんだ黄色の植物を、山頂約200m手前の岩棚コル付近で発見した。それは小低木のミヤマハンノキ、ダケカンバの枝葉の下にあって、付近にイワカガミ、コケモモ、キバナノコマノツメが生えていた。岩の割れ目から落ち葉を分けて、ズングリとした黄色が一本突き出していた。このオニクらしい植物は色だけでなく高さも太さも違っていた。今まで多くの山々を登ってきたが、このような黄色いオニク属植物は今まで見たことが無い。高さは8～9cm、太さは基部で20mm、上部にかけて花冠部分が太く30～40mmであった。赤褐色のオニクもコル付近に数本以上生えていた。帰路後オニクらしい黄色の植物に関する文献等を精査したが、特定に至らなかった。他にも希少種が自生するこの山域では、より詳しい調査が必要となり、オニクらしい黄色の植物の標本の持ち帰りを目的に、一泊二日でまた計画することとなった。

2019年6月29日、富士見町釜無川現流域に、竹重聡・五味直喜・木下義彦・佐藤仁昭・宮澤豊・酒井志磨・菅原敬の7人で入山して、2018年に発見したオニク属らしい黄色の植物と赤褐色のオニクがあったコル周辺域及び、鋸岳山頂手前第一高点から山頂までを重点的に調査した。

その結果、2018年に発見したコル付近から、登山道脇の岩棚西側斜面に下ったところで、新たに黄色一色の植物を一本、また発見した。高さ7cm、太さは基部で約20mm、上部は30mmを超えた。この岩棚の周り一帯に、黄色一色植物はこの一個体だけだった。赤褐色のオニクと黄色一色の植物の二本と、去年のオニクらしい黄色の植物の一部も採取して持ち帰った。

新品種キバナオニク

この植物は赤褐色を呈するふつうのオニクと同所的に出現しているが、萼や花冠がすべて黄色なため容易に識別できる。花序の特徴、雄しべの配置、萼や花冠等の花形態を詳細に比較検討したところ、オニクの色変わりではないかと考えられたため、新品種 *Boschniakia Rossica* (Cham. & Schltdl.) B. Fedtsch. f. *flavocorollata* T. Sugaw. (キバナオニク) と命名して記載した (Sugawara & Takeshige 2020)。

おわりに

黄色いオニクについて、日本国内で採取報告例や新産地の論文等はない。国外では中国東北部から簡単な報告があるが、その実体については不明な部分が多い。従って今回の確認はとても貴重な発見である。

どうして南アルプスの北部の鋸岳の岩棚なのか？

その先の東駒ケ岳には出現しないのか？ どうして黄色なのか？ 分かっていない。しかし黄色のオニクが少なくとも2年連続出現したことは大きな発見といえる。

キバナオニクは植物体の長さが2本とも赤褐色のふつうのオニクの半分ほどである。棒状の赤褐色オニクに比べて小さい。短くなると形状はよく似る。全体形状と色は違うが、詳細な花の各器官の比較検討の結果は、大きな相違点が見られない。キバナオニクが2年連続で出現していることから、1つの分類群として確立している可能性が高い。鋸岳までの行程が相当厳しいのであるが、今後2～3年は同時期に調査を継続しなければと考える。今回遺伝子解析に挑戦したが、標本が健康体でなかったためか、成功せず結果を出せなかった。

赤褐色のオニクは、漢方の世界では貴重な植物とされ、強壯、強精剤として使われる。マタタビと同様にネコが非常に好むそうである。貴重な植物としては、出会うことが稀なことと標本保存が少ないからあまり話題にならない。開花の7～8月頃、標高2500～2700mの周辺で、コケモモがマット化した付近を探して、ミヤマハンノキの根が張っている場所なら、見つける確率はかなり高い。

謝辞

今回の調査について、採集等の許可をして下さっ

た環境省並びに長野県・山梨県の関係機関に深く感謝いたします。

引用文献

Mabberley, D.J.(2017) Mabberley's Plant-Book
Forth Edition. Cambridge University Press,
Cambridge

清水建美 (2002) 山溪ハンディ図鑑 8 高山に咲

く花 97pp. 山と溪谷社、東京.

山崎敬 (2003) フィールド版 日本の野生植物 草
本Ⅲ－111pp.53pp. 平凡社、東京.

Sugawara T. and Takeshige S. (2020) A New Form
of *Boschniakia rossica*(Cham.Schltldl.)B.Fedtsch.
(Orobanchaceae) from Mt.Nokogiri-dake in the
Southern Alps, Japan The Journal of Japanese
Botany 95(3); 158-161